

『キタイ』

作 じんのひろあき

初演 二千十六年四月

登場人物

伏姫

イキタイ 犬塚信乃
テキタイ 犬山道節
コキタイ 犬坂毛野
キキタイ 犬飼現八
カキタイ 犬村大角
ウキタイ 犬田小文吾
トキタイ 犬江親兵衛
ナキタイ 犬川莊助

、大法師 (ちゆだいほうし)

ケキタイ
コキタイ
チキタイ

ロキタイ
ニキタイ

フルタチイチロウ

小学生達 (は、出演者がそれぞれの小学生となり演じる)

客電。

声 「宇宙ロケット打ち上げの実況が流れ・・・」

発射の爆音、ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・
その音と共に暗転。

舞台奥に台。
床は様々な色の風船で埋め尽くされている。

●地球の衛星軌道上

ソ連の人工衛星スプートニク二号。
その中に女の姿。
彼女は人ではなくライカという名の犬。
であり、伏姫。
そのスプートニクから伸びたロープの先、八人の犬士。

伏姫「マイライフアズアドック。一人の少年が毎日の日記の最後に書き記す。マイライフアズアドック、僕の人生はその犬よりはましだ、と。その犬、ライカ犬はある日、ロケットで打ち上げられた。九十分で地球を一回りする周回軌道へ。そして、そのまま、ずっと、ずっと地球を回り続けている。もちろん、そんなことを犬が望んだわけではない。少年はスエーデンの片隅で日記を書き、その最後に書き添える。マイライフアズアドック、僕の人生はその犬よりはましだ。と。スエーデンの片隅で生きる少年は自分の人生があまりめぐまれたものではないことを知っていた。けれども、と彼は思った。あの、わけもわからずに宇宙にロケット

で飛ばされてしまった犬よりは、ましな人生なのではないか。マイライフアズアドック。あの犬よりはましな人生・・・私は二度と・・・戻れない・・・青い地球。青い地球には戻れない。青い地球には二度と戻れない。あの大地に・・・帰って・・・キタイ」

●秋葉原の地下・ロケット格闘場

薄暗いアンダーグラウンドの競技場。
金を賭け、ロケットを戦わせる競技場。
ライト明滅。コントラスト激しい。
金を握りしめた、ここよりほかに行き場のない者達の罵声と怒号。
スプートニク二号のロープはこの格闘場のリングのロープへ。

そして、煽るように司会者フルタチの声。

フルタチ「さあ！ いよいよ第十二試合、メイインベントの時間がやってきました。ここアンダーグラウンドロケットバトルはさらに白熱、ヒートアップしていきます」

リングアナ「青コーナアアアの格闘ロケットオオ、犬山道節うらうら、入場です」

フルタチ「短い花道を巨大な装甲人型ロケット犬山道節。コントローラーによって操縦されて、ゆっくりと、ゆっくりと歩みを進めてゆきます」

まとわりつく観客達。
テキタイを囲む後の期待外れの面々(ケキタイ、チキタイ、コキタイ)がその観客を威嚇し、吠える。
その真ん中を歩くリモコンを持った男、テキタイ。

背後に立つテキタイのロケット犬山道節。

フルタチ「さあ、変わりまして赤コーナー、背丈三メートルの人型ロケット犬塚信乃の入場です。道節と信乃、互いが三勝三敗一引き分けというまさに互角の実力、互角の戦いに今日、決着をつけたと思うのは、この八角形のリングの周囲に詰めかけた、しわくちやの金を握りしめて雄叫びを上げる人々ばかりではありません。さあ、今、控室で、心のゴングを自ら鳴らそうというのか・・・」

イキタイ登場。

テキタイがリング上から煽る。

テキ「犬塚信乃、怖じ気づいたか、早いとこ出てきやがれ」

イキ「るせえ・・・」

テキ「しょんべんちびってんじゃねえぞ、おらああ」

イキ「うるせえって言うてんだよ」

テキ「出てこい、おらああ」

イキ「待ちやがれ！ 行ってやるぜ、信乃、来い！」

イキタイのロケット犬塚信乃の駆動音。

ぐおおおおおおお・・・
リングアナ「赤、コオナアアアア、犬塚シイイイノオオ」

フルタチ「犬を戦わせる闘犬の伝統の末裔、場末のこのリングにおいて、鉄とステンレスと、ボルトとナットで作られたまさに闘犬のようなロケット犬塚信乃と犬山道節のデスマッチのゴングが今、打ち鳴らされようとしています。天下無双のロケットバトル。電流オーケー、火薬オーケーのデスマッチ。さあ、おまたせいたしました、赤コーナー、犬塚信乃！ 今、見参です」

観客の声「信乃！」
観客の声「信乃！」
観客の声「信乃！」
観客の声「犬塚信乃に五百！」
観客の声「こっちは八百！」
観客の声「俺はこっちにあと五百追加だ！」
などなどと口々に・・・

その花道を来るイキタイに襲いかかるテキタイ。

テキ「いつまで待たせんだよ、ばかやろう」
フルタチ「おっと、試合開始前にもかかわらず、殴りかかっていく、これは旋破りのフライング戦法だ」

イキ「まだゴングが鳴ってねえだろうが！」

テキ「先制攻撃だよ！」

イキ「てめええ、今日という今日は・・・」

テキ「ほざけ！ぶっ潰されてえかあ」

フルタチ「まだゴングは鳴っていない、まだゴングは鳴っていない、しかし、戦いの火ぶたはすでに切って落とされています」

テキ「くらええええ」

イキ「うおおおおお」

フルタチ「二人がもつれあい、殴り合っていたかと思うと、二人、同時に身をよじらせて倒れ込んだ。これはどういうことか、なにが起きたか、なにが起きたか・・・」

イキ「熱い、熱い。体が熱い、まただ・・・燃えるように・・・」

テキ「俺の体が・・・熱いんだ・・・」

この地下競技場の客席の後ろ、すつくと立つ、

大法師、その側にユキタイ。

大法師「あれか・・・あの男達か」

ユキ「そう、私の体に浮かぶ文字が告げる・・・ユの文字が熱く痛んで私に告げる」

大法師「あの者達は・・・兄弟」

テキ「おまえと戦う度に、いつも俺の左の肩が火照る」

イキ「俺の右の胸が痛む」

大法師「あの男の胸に、イの文字」

イキ「(痛み)う、う、うわあああ・・・」

大法師「あの男の肩に、テの文字」

テキ「それでも！俺はおまえをぶっ潰す！」

イキ「この痛みこそ、俺の怒りのガソリンだ！」

大法師「そこまでだあ！」

大法師、リングに降り立った。

組み合おうとするイキタイとテキタイを手にした六尺棒で右に左にとなぎ払う。

フルタチ「おっと、リング上に乱入者だ」

大法師「おまえ達は戦ってはならぬ！」

テキ「なんだてめえは！」

大法師「我が名は、大法師(ちゆだいほうし)！」

イキ「どけ！邪魔すんじゃないねえ！」

大法師「ならぬ。おまえ達のその力は、兄弟で殺し合うために与えられたモノではない！」

イキ「兄弟？」

テキ「こいつと俺が兄弟だと？」

イキ「笑わせるな！」

ユキ「冷たい空に走る雷のごとく、その犬は天駆けた。その胸の内には火をたたえた、雷火の犬」

イキ「ライカの犬！」

テキ「ライカ犬！」
大法師「戦うな、引け、引くんだ」
イキ「俺に命令するんじゃないねえ、俺は俺の自由にイキタイ。今は目の前のそいつを叩きのめしたい。ただそれだけだ」
テキ「俺はこいつを潰す。叩きつぶす。戦つテキタイんだ」
と、そこで警報がけたたましく鳴り響く。

警察1「警察だ！動くんじゃない！」

客の声「手入れた！」

客の声「警察だ！逃げろ」

客の声「逃げろ！」

客の声「逃げろ、逃げろ、逃げろ！」

だが、その喧噪、一瞬にして無音へ。

イキタイの目の前にひらひらとアゲハ蝶。

イキ「待て、蝶がいる・・・アゲハ蝶がいる・・・秋葉原の地下四十五メートルに蝶が・・・舞っている」

ユキ「その蝶に付いて行って・・・」

イキ「なんだと？」

ユキ「この蝶について・・・逃げて、早く！」

イキ「犬塚信乃を！俺の、俺のロボットを置いてはいけねえ！」

ユキ「逃げて！」

イキ「信乃！」

大法師「逃げ！その蝶に続け！」

大法師に突き飛ばされるようにしてイキタイ、駆け出す。

×× ×× ×× ××

一方、テキタイ達。

ゲキ「こっちはダメだ」

コキ「こっちもダメです」

チキ「絶体絶命！」

テキ「くそおお・・・しかも」

ゲキ「しかも？」

テキ「俺の体の痣が、テの文字の痣の熱と痛みがましている」

カキタイ、キキタイが登場。

カキ「なにをしている、こっちだ」

テキ「てめえは誰だ？」

キキ「逃げたい？逃げたくないの？」

チキ「もちろん、逃げたいです」

キキ「ならばこっち」

コキ「わあああい」

と、はける。

ゲキ「続け！」

と、はける。

チキ「ありがとうございます」

と、はける。

カキ「なにをしている、テの文字を持つ者！」

キキ「遅れるな、手遅れになるぞ」

テキ「おまえらいつたい、何者なんだ？」

キキ「それを私に聞か、聞きたいってのは私のほうさ。私は体にキの文字を持つキキタイ」

カキ「私は体に力の文字を持つカキタイ」

カキ・キキ「我ら、ツンドラの大地、ソ連の果てから打ちあげられた、人工衛星スプートニク二号に乗せられし、ライカ犬の子供」

テキタイを連れてはけていくカキタイとキキタイ。

テキ「意味わかんね〜よ〜」

●秋葉原ネオラジオシティ

迷路のようなその作り。

ユキ「ひらりひらりと、舞い遊ぶように姿みせたアゲ八蝶」

イキ「待て、待ってくれ・・・いったいいくつかの階段を上り、いくつのドアを開け、いくつの角を曲がる？」

ユキ「ここはアキバの九龍城」

イキ「クローン城？」

ユキ「電子のパーツが売られている魔窟。今はなき香港九龍城を真似て作られている。一歩足を踏み入れたら最後、出口にたどりつける者は、わずか数パーセント。誰でも体験できる迷惑な脱出ゲーム付きのショッピングセンター、それが秋葉原ネオラジオセンター」

イキ「おまえは・・・迷わないのか？」

ユキ「ワタシはこのネオラジオセンターで生まれ育った、魔窟の娘。この中は目をつぶってても歩いて行ける」

現れる、大法師。

イキ「誰だ！」

大法師「おまえか、イの文字を持つ八犬士の一人は」

イキ「八犬士？ なんだそれは？」

大法師「天駆けるライカの犬が放つ、雷火の光落つる先、八人の子らの命が生まれた。雷火の犬、伏姫の子」

ユキ「私たちはその八人の子の一人」

イキ「なにを証拠に？」

大法師「口を開けさせろ」

ユキ「口を開けさせろ」

イキ「口を開けさせろ」

大法師「歯の治療だ。おまえが犬の子かどうか、診断してやる。言っただけでなかつたか？ 俺は歯医者だ」

イキ「負け犬か！」

大法師「負ける敗者ではない、デンティストの歯医者、日々、虫歯と戦う歯医者だ」

イキ「俺に悪い歯はない」

大法師「ないわけではない」

ユキ「とつとと開けてええ、おら、おら、おら、おら」

イキ「（口を開いた）んがっ！（そして、口を開いたままで）ホレハ・・・ワルヒハハナヒ（俺は悪い歯はない！）」

大法師「みる、こいつの歯を。立派な糸切り歯じゃないか」

イキ「ホレハ・・・ワルヒハハナヒ」

大法師「立派な糸切り歯を持つ犬士」

ユキ「立派な犬歯。間違いない、立派な八犬士の一人だ」

大法師「おまえは自分が立派な犬士であることに気づいていない」

ユキ「犬の侍、それが犬士」

大法師「犬歯は牙」

ユキ「牙は武器」

大法師「いざとなったらこれで戦うことだってで

きる」

ユキ「それがキバ戦」

伏姫「イキタイ」

テキ「イキタイと・・・俺の耳に囁く、あの声は誰だ？」

大法師「おまえの親、雷火の犬だ」

イキ「ホレノ・・・ホヤハ・・・犬ジャナイ・・・」

ユキ「親が誰かまだ知らないだけよ」

大法師「親を知らない」

イキ「ほやほ、ひらなひ・・・」

大法師「どうりで・・・おまえの立派な犬歯と同じくらい、立派な親知らずがある」

ユキ「親知らずの犬士よ」

大法師「この、親知らずの、親知らずを、今、抜いてやる」

大法師、イキタイの親知らずを抜く。

イキ「は、は、は、ああああ！」

、大法師、抜く。

ユキ「ぐりぐりぐりぐり」

イキ「は、あ、ああ・・・」

ユキ「ずぼっ！（それを捨てた音）からん、ころん、からん・・・」

イキ「親知らずが抜かれて・・・俺は、親を知る」

伏姫「イキタイ」

イキ「ライカの犬・・・俺の・・・親」

大法師「親だけではない、おまえはおまえ自身を知るのだ」

イキ「俺は誰より俺が一番よく知っている」

大法師「それは本当か？」

イキ「なんだと？」

大法師「本当におまえはおまえのことをわかっているのか、と、訊いているんだ」

イキ「なんだと？」

大法師「じゃあ、この奥歯の奥はどうだ」

イキ「奥歯の奥？」

大法師「親知らずがあつた奥歯の奥、さらに、もう一本、余計な臼歯がある」

イキ「親知らずの奥に？」

大法師「我知らず、という余計な歯だ」

ユキ「ワレシラズ」

大法師「我知らずがある限り、おまえは、おまえのことなぞ、わかっちゃいない」

ユキ「ぐりぐりぐり」

イキ「うおおおお」

ユキ「すぼん、からからからん」

イキ「奥歯の奥、我知らずを抜かれて、俺は我を知る・・・」

大法師「おまえは誰だ？」

イキ「熱い、俺の体の、イの文字が熱い」

大法師「今、まさにキタイが高まっている。イの文字がおまえの体で燃えているだろ」

ユキ「、大法師は、キタイを集めるのが仕事」

イキ「キタイを集める」

キキ「それが使命」

カキ「おまえの体のイという文字にキタイを寄せる」

伏姫「イキタイ」

大法師「イキタイ、それがおまえ」

伏姫「出会いなさい、イキタイ」

イキ「出会う？ 誰と？」

伏姫「おまえとおなじように、体に一つの文字を持

キキ「それはまるで牙のごとく」
テキ「立派な俺のこの犬歯が牙であるなら、せいぜいその牙を向くだけさ」
カキ「こちらに牙をむくな」
キキ「こいつ刃向かう気だ」
カキ「自分の運命も知らずに」
テキ「運命？ 俺の運命？」
キキ「そうだ、おまえの運命だ」
カキ「運命とは運ばれた、命」
テキ「どこから運ばれた？」
カキ「地球の衛星軌道上から」
テキ「それはどこに運ばれた」
キキ「おまえの肩に・・・」
テキ「この肩にあるのはテの文字」
キキ「千九百五十七年十一月三日ソビエト連邦によって打ち上げられた宇宙船スプートニク。そこに乗せられたの一つの命」
カキ「それに乗せられた犬の名前はライカ、雌、三歳、人間の年齢で言うなら十七歳」
キキ「千九百六十年十一月のあの日・・・あの空を流れていく雷火の犬のキタイを背負いし者よ」
テキ「うわああああ」
カキ「スプートニク二号より運ばれし命、運命の子よ」
テキ「運命は俺に・・・なにを命じる？」
カキ「仲間を集めよ。おまえ達と同じように体にライカ犬の願いの文字を持つ八人の者を」
テキ「八人が集まると、どうなる・・・」
伏姫「城へ向かえ」
テキ「城へ向かう？」
伏姫「天守閣を目刺し、そこを降りろ」
テキ「天守閣を・・・降りる？ すまんが・・・親の期待には背くことにはしてらんのだ」
と、踵を返すテキタイ。
キキ「逃げ去る気か、おまえは仲間だ」
テキ「おまえらは仲間じゃない。俺には仲間がいる、おまえらが期待外れとのしる奴らが・・・俺の仲間はいつらだ。おまえらは仲間じゃない、敵だ。俺にあれこれ指示する俺の敵、テキタイの敵、敵の前からは逃げ出すに限る」
キキ「敵前！」
カキ「逃亡！」
テキ「その通りだ！」
ケキタイ、身を翻した。
テキタイ、チキタイ、コキタイも後に続く。

●再び秋葉原ネオラジオセンター
、大法師、ユキタイ、そして、イキタイの前でテキタイを逃した報告をしているカキタイ、キキタイ。
、大法師「テキタイが敵前逃亡だ」と
カキ「甘かった・・・ライカの犬の子供である証、文字の痣の熱と痛みが引き合うなら、志を共に、城へ向かってくれると信じていたのに・・・」
キキ「いや、それでも奴も八犬士の一人であるなら、たとえ一人でも城へ向かってくれるはず・・・スプートニク二号から運ばれた命、運命により、やつは命をこの地に宿した」
ユキ「宿した命に宿る宿命」
キキ「宿る宿命を飛び出した宿無しの犬」

、大法師「テキタイに敵前逃亡された今、残る犬士はウの文字を持つ、ウキタイ、ナ文字を持つナキタイ、ト、の文字を持つトキタイ」
キキ「ウキタイとトキタイの居場所はわかってる・・・」
ユキ「手分けして、とつつかまえて仲間に入れないと、だね」
キキ「そして、一刻も早く、城を目指さねば」
イキ「城へ・・・向かえ・・・城とはなんのことだ・・・」
キキ「イキタイ・・・」
カキ「親を知ったか・・・」
イキ「天翔るライカの犬」
キキ「そうだ」
イキ「おまえ達も、親知らずを抜き親を知ったというわけか」
カキ「ちがうな」
イキ「違う？」
キキ「親知らずを抜き本当の親を知るとは、それまで育ててくれた、育ての親を忘れるということだ」
キキ「そんな情け知らず、礼儀知らず、世間知らずは犬畜生に劣る・・・」
カキ「私達は生みの親を親と思い、育ての親を親と思う・・・見ず知らずの私達を大切にここまで大きくしてくれた・・・」
キキ「父さん！」
カキ「父さん」
と、ここで、大法師が六尺棒でドン！と床を突いた。
イキ「そういう話か！」
、大法師「育ての親とて、親は親。親の心子知らずだとばかり思っていたが、父さんと呼んでくれる日が来ようとはな」
そして、出て行くこととするイキタイ。
ユキ「イキタイ、どこへ？」
イキ「城へ向かう戦いの話ならいざしらず、俺は家族がどーしたとかって話がでえつきれえなんだよ。俺はイキタイ。俺は俺のロボット、犬塚信乃を取り戻しにイキタイ」
、大法師「ユキタイ、付いていけ」
ユキ「あいあいさー」
イキ「おまえはなんなんだ」
ユキ「私はユの文字を持つユキタイ、あなたに付いてユキタイ。おいで毛野」
イキ「このアゲハ蝶・・・」
ユキ「私が作った羽ばたき型マイクロロボット、犬坂毛野」
イキ「これが・・・ロボット、まるで本物のアゲハ蝶のように・・・ひらりひらりと舞い遊ぶように・・・」

●ロボット格闘場
警察の手入れ後。
キーブアウトの黄色と黒のテープが貼られている中で、机にアナウンサーの男フルタチと警察が向かい合い、フルタチ、執拗な取り調べを受けている。
警察1「ロボットを戦わせる」

フルタチ「そうです」
警察2「詰めかけたお客は強いロボットに金を賭ける」

フルタチ「そうです」

警察1「勝利したロボットに賭けた者は配当金を受け取る」

フルタチ「そうです」

警察2「そして、そのロボットの持ち主にも配当が渡される」

フルタチ「そうです」

警察1「だからそのロボットの持ち主は、どこ誰だつて聞いてるんだよ」

警察2「それをさっきから聞いているんじゃないか」
フルタチ「ですから．．．それは、わからない、と」
警察1「わからないじゃ、わからないだろう！」

と、やってくるナキタイ。

ナキ「ども、ども、ども．．．（そして、犬塚信乃を見つ）こいつですか、産業廃棄物は」

警察2「おお、産業廃棄者」

ナキ「はい、はい、毎度ありがとうございます。産業廃棄物のあるところ、どこでも参上、参拝いたします。一度ならず、二度三度、三拝九拝いたします。産廃業者の、ス、でございませう。いらぬ物をば捨て去る産業、ステル産業『ス』でございませう。ステルスとお呼びください」

警察2「そこにある人型ロボットを捨ててくれ。犬塚信乃だ」

ナキ「こんな立派なロボット達が産廃に」
警察1「持ち主が置き去りにして逃げてしまったんだ」

ナキ「こんなモノを残して．．．」
警察2「二度と取りに戻ることはない」

ナキ「それはまたどうして？」
警察1「戻れば捕まえてやるさ」

ナキ「なるほどねえ」
と、気配を消して戻つて来ているイキタイとユキタイ。

イキ「あつた．．．俺のロボット、犬塚信乃」
ユキ「ダメだつてば、身を乗り出しちゃ、見つかったら」

ナキ「はいはいはいはい．．．それはもうわたくしめ、ステル、ス！におまかせ下さい。この巨大な産業廃棄物、人の気づかぬよう．．．人の目に触れぬところへと葬り去らせていただきます」
イキ「待て！ 待て待て待てえ！」
ユキ「ダメ！ 今、出ていくと捕まってしまう」
イキ「どうしたんだ、さつきから、ずっと．．．俺の体のイの文字の痣が疼いている」

ユキ「それは．．．私のユの文字も．．．」
ナキ「それもまた自分の痣のあるあたりを押さえ、もたえる。」
ナキ「熱い、どうした．．．俺の体の痣が、さつきからうずく、激しく、熱く、うずく．．．」
ナキ「ナキタイが右の太ももを押さえ、はだけける。」

そこに『ナ』の文字。
イキ「あれは！」
ユキ「私達と同じ痣」
ナキ「うぐぐ！」
イキ「奴の文字はナ！」
ユキ「ナキタイ．．．ここに居たのか」

ナキ「産業廃棄物達よ。うち捨てられた、いらぬ物達よ」

信乃と道節の駆動音。

グオオオオオオオオオオ！

ナキ「いざ行こう、我と共に。七番目の夢の島へ。おまえ達産廃物が永遠に眠る、その場所へ。私は廃棄の王。廃棄の王が捨てて行く道、ハイキングの道、キングロードへ」

● テキタイのアジト

視察していた期待外れの面々が戻つてきてテキタイに報告している。

ケキ「産廃業者．．．いえ、ナの文字を持つ男が信乃と道節を廃棄するため、ハイキングロードをひた走っております」

コキ「ナの文字を持つ」

チキ「それはナキタイ」

ケキ「その後を追つ、我々の敵、犬塚信乃を作りし、イの文字を持つ男．．．」

チキ「そいつはイキタイ」

ケキ「体に文字の痣、俺には．．．テ」

ケキ「テの文字にキタイを寄せれば、それはテキタイ。対抗すること、刃向かうこと。そんな強い意志を持った言葉になる。テキタイ、キタイを寄せれば、それは素敵な言葉。でも、おいらの痣に、例えキタイを寄せたとしても．．．ケキタイ、ケキタイなんだ。ケキタイ（自嘲する）ケキタイ、ケキタイ、なんだよ、ケキタイつて、ケキタイ、どういう意味なんだよ」

チキ「私の体のチの文字だつて」

ケキ「チキタイ」

チキ「チキタイじゃ意味がわからない。チキタイ、チキタイ、なにがチキタイなんですか」

コキ「俺のコの文字だつて同じ事．．．このここに」

コキ「の文字が」

テキ「なんだつて？」

コキ「この（この）（この）、はつきりと」の文字が！」

テキ「コキタイ．．．」

コキ「僕は意味があります。ケキタイやチキタイと違つて、キタイを寄せると意味を持ちます。ただ．．．コキタイのは屁です、（大声で）屁をこきたい」

ケキ「だから、テキタイの兄貴、おいらは兄貴についてキタイと言つたところで」

コキ「誰が屁をこきたい奴を連れて行キタイと思ひますか。それでも俺はテキタイの兄貴についてキタイ、少し後ろからついてくならかまやしないですよ」

チキ「だだけ、そんな私達が側に居ちゃ迷惑でしょ、距離を置キタイでしょ？」

テキ「誰がそんな事を言つた」

コキ「わかつてはいました、俺達がどんなに、あなたについてキタイと言つたところで、おまえを連れてキタイと言つてもらえるわけもないことを」

ケキ「おいら達はキタイにそぐわない、字を体を持つ期待外れでしかありません」

テキ「おまえ達は期待外れじゃない．．．いいか、ケキタイ！」

ケキ「はい、ケキタイです」

テキ「ケキタイじゃ確かに意味がわからねえ．．．」

なんでだかわかるか？」
ケキ「まだ、それがわかるには修行が足りないかと」
テキ「真面目だな」
ケキ「それだけが、おまえの取り柄なんだから、と、死んだおばあちゃんが褒めてくれました」
テキ「おまえは良い奴だな」
ケキ「そうですか？」
テキ「悪い意味で・・・だ」
ケキ「そんな！」
テキ「だいたいおまえは、清らかすぎるんだよ。もつと汚れる、もつと濁れ、濁れ、もつと濁れ、ケキタイの文字よ濁れ、濁って、濁点をつけるんだ」
ケキ「ケの文字が、ゲに・・・」
テキ「そうだ、ケの文字を濁らせろ」
一同「ゲ」
テキ「そして、キタイを寄せろ」
ゲキ「ゲ・・・キタイ」
一同「ゲキタイ！」
ゲキ「俺は・・・ゲキタイ」
テキ「ゲキタイよ」
ゲキ「はい！」
テキ「俺の、テキタイの右腕となれ、いいな！」
ゲキ「喜んで」
テキ「キタイよ」
チキ「はい、チの文字を持つチキタイはここに」
テキ「チキタイ、チキタイ、確かにチキタイじゃあ意味がわからん」
チキ「期待外れですよ」
テキ「キタイを寄せれば、チキタイとなる。だが、ここが思案のしどころだ」
チキ「思案のしどころ？」
テキ「思いを巡らせろ・・・おまえの体に浮かぶチの文字を巡らせろ」
チキ「チの文字は巡ってどこへ」
テキ「キタイの後ろへ」
チキ「キタイの後ろ？」
テキ「キタイに続け」
コキ「チの文字がキタイに続く」
チキ「キタイ・・・チ」
他の期待外れ達が口々に「期待値・・・期待値・・・期待値・・・私は私にどれだけ期待できるのか？」を問いつける・・・」
テキ「期待値」
チキ「はい・・・」
テキ「この字を持つおまえ・・・」
コキ「この文字はここに」
テキ「はい！この文字も思案のしどころ。この文字を後ろにつけたとて、キタイコ・・・」
ゲキ「ダメだ、キタイコじゃ意味をなさない」
テキ「おまえは俺の前に並ぶんだ」
コキ「キタイの前に・・・」
テキ「さすれば、おまえは」
コキ「コ・・・キタイ」
他の期待外れの面々「鼓笛隊・・・鼓笛隊・・・鼓笛隊・・・」
テキ「俺の前で・・・いや、この期待外れの皆の前で、笛吹き鳴らせ、ドラムを叩いて、皆を鼓舞しろ、なぜならおまえは・・・」

コキ「コキタイだから・・・鼓舞する・・・」
ゲキ「皆を元気づける」
コキ「鼓笛隊」
テキ「先頭に立て」
チキ「旗を振れ・・・」
ゲキ「期待外れを率いる、テキタイの一派がここに居るぞと」
テキ「笛吹き鳴らせ、ドラムを叩いて、皆を鼓舞しろ、なぜならおまえは・・・」
コキ「鼓笛隊だから！（コキタイ、狂ったように）パンパカパン、パンパンパン、パンパカパン、ズンチャン、ズンチャン、ズンチャカチャン、はい！」
ゲキ「いざ続け、テキタイに。七番目の夢の島へと向かうぞ。捨てられし産廃物が永遠に眠る、その場所へ。ナの文字を持つ廃棄の王がゆく、ハイキングの道の果てに、俺たちはテキタイと共に・・・」
テキ「期待外れの者達が、そこに居場所を見いだした時、桁外れの力を出すだろう」
ゲキ「俺達は期待外れ、期待外れの名の通り、おまえ達の期待にはそぐわぬかもしれん。だがな、仲間はずれにされ続けた者だけが持つ力がある。それは並外れた力」
チキ「外れ者の、訪れを刮目（かつもく）して待ちやがれ」
●ジギスムント学校
そこは小学校か中学校かの教室。
この学級は小学生に見えたり、中学生に見えたり、高校生に見えたりする。
学級委員の神田ほのかが日誌を読み上げている。
ほのかは赤い眼鏡をかけていたりする。
ほのか「（が読み上げる学級日誌）リンゴ月ヒラメ日（にち）今日、私たちの六年うるし組に転校生がやってきた」
先生「はい、みんな、静かに、先生来てるよ、ここにいろよ。さて、今日は転校生がこのクラスにやってきます」
益子「えーまじーでー」
田尾「うっそ、転校生なんて聞いてねえよ」
宇佐見「男の子かな」
松井「女の子かな」
吉田「仲良くなれるかな」
越中「友達になれるかな」
ほのか「男子、静かに」
先生「はい、じゃあ、入ってもらいますよ。今日からこのクラスのみんなと暮らすお友達です」
一ノ瀬「クラスのみんなとクラスだつて」
吉田「ダジャレだ」
宇佐見「ダジャレだ、ダジャレだ」
先生「言葉遊びです」
ほのか（学級日誌）転校生の紹介をほつぽらかして、うるし組はいつたいなにをやっているのだ・・・と、学級日誌に書いたが消しゴムで消した。そして、かわいそうに廊下で待たされていた転校生が教室へと入ってきたのだ」
平川「今日からこの学校に転校してきます。みなさ

ん、よろしくお願いします」

先生「はい、みんなよろしくね・・・」

宇佐見「男の子だ」

田尾「男の子だね」

宇佐見「男の子だ」

ほか「(学級日誌) 転校生は一人じゃなかった」

おおさき「よろしくお願いします」

ほか「(学級日誌) 一人でもなかった」

越中「よろしくお願いします」

田尾「何人いるんだよ？」

松井「おいおいおいおい・・・」

益子「どんどん来るよ、どんどん来るよ」

石田「よろしくお願いします」

ほか「(学級日誌) 次々と現れる転校生達。その

数は十一名だった。このクラスは少子化により今

や十名しか生徒がいないのに・・・ただし、その

少子化のおかげで、うちのクラスは空いている席

がいっぱいあった・・・」

先生「じゃあ、みんな、自分の席に座ったね・・・

じゃあ、授業を始めるよ。教科書がまだ届いてい

ないから、転校生のみなさんは隣の人に見せても

らってください。隣の人も見せてあげてください」

一同「はい」

宇佐見「はい、はい、はい」

授業が終わった。

益子「ねえねえ、どこから来たの？」

一ノ瀬「どつから来たの？ どつから来たの？」

おおさき「どこから？」

吉田「どこから？ どこから？」

松井「前の学校はどんなところ？」

口バート「今日、学校終わったらなににする？ なに

する？」

松井「転校生が十一人いる」

田尾「十一人いる」

はるか「『十一人いる』は一人多い物語」

宇佐見「十一人多い」

ほか「(学級日誌) それは突然やってきた・・・

その現実を受け止め、やっていくしかなかった・・・

・・・仲良くするしかない・・・彼らと・・・みんな

で・・・それは、私は・・・とても悲しいこと

のように思えた。その日、雨、私達のクラス、う

るし組に転校生がやってきたその日は雨。天候は

悪天候だった」

●海洋研究所

それは海の側にある。

『ウ』の文字を持つ者は港に近い海洋探査の研

究所で見習いをやっていた。

深海作業用のロボットを作っているウキタイ。

ウキ「ダイオウイカめ、まとわりつくな。ちがう、

俺のロボットはおまえの食べ物じゃない・・・口

ポットを急速浮上させろ！ 引き上げるんだ、早

く、早く、早く上げてるんだ」

振り向いたウキタイ、グラサンをかけている。

やってくる、大法師。

ウキ「歯医者さんが、私を訪ねてきたと聞いたもの

で」

大法師「歯科医の、大法師という者です」

、大法師もまたサングラスをかけた。

ウキ「歯はどこも悪くはありませんが」

、大法師「親知らずはどうですか？」

ウキ「とつくの昔に抜きました」

、大法師「ということは、親知らずでない」と

ウキ「そうですね、親は知っています。私の脇腹に

はウの文字。ごらんになりますか？」

、大法師「いえ、結構です」

ウキ「母なる伏姫は、我々に城へ向かえと」

、大法師「ゲンという名の城へ」

ウキ「その天守閣を目指せ、と」

、大法師「天守閣とは名ばかりのその場所。天に守

られることのなかった核」

ウキ「天が守らざる核」

、大法師「だからこそ、そこへ人工衛星で打ち上げ

られたライカ犬の子供達が、その手で作りだした

分身によって辿り着キタイと」

ウキ「私は深海作業用のロボットが専門です。私の

ロボット・・・犬田小文吾」

、大法師「この小文吾で村正を運んでもらいたい」

ウキ「村正・・・」

、大法師「名刀と言われている村正です」

ウキ「名答とは、正しき答えのことですか？」

、大法師「ご名答」

ウキ「村正とは何のコードネームで？」

、大法師「これです」

と、大法師、ウキタイに向かって右手の人差

し指と中指を突き出してみせた。

、大法師「村正とは染料のこと」

ウキ「なにを染める」

、大法師「線量を」

ウキ「線量を？」

、大法師「放射線の線量を」

ウキ「放射線の線量を染める」

、大法師「さよう、これは放射能に色をつける、染

料」

ウキ「それが村正」

、大法師「抜けば玉散る氷の刃、それがこの名刀村

正のキヤッチコピーだ」

ウキ「抜けば玉散る」

、大法師「赤い玉散る・・・大地に玉散る・・・」

ウキ「まるで血を流したように・・・」

、大法師「血は・・・とつくに流れている・・・た

だ・・・見えないだけだ」

ウキ「それを見せることが・・・」

、大法師「天駆けるライカ犬の願いだ・・・やっ

てくれるか」

ウキ「遅いぜ」

、大法師「なに？」

ウキ「遅かったと言ってるんだ・・・この命を使う

使命を告げる使者、大法師さんとおっしゃいま

したかね。あんた登場が遅すぎますよ」

、大法師「遅すぎる・・・」

ウキ「俺の人生への登場が遅すぎると言ってるんだ」

、大法師「申し訳ない、待たせてしまったか・・・」

ウキ「遅い・・・遅いよ・・・遅すぎる・・・あん

た、俺がどんな思いで俺の本当の仕事が何かを知

る時を待ちわびていたか・・・」

、大法師「すまない」

ウキ「親知らずが抜け、親を知り、そのさらに奥の

我知らずが抜け、我を知った十二の春から、いつ

たい幾度の春が巡り来たというのか・・・どれだ

けの時間が無駄に流れたというのか・・・」

「大法師「無駄ではない・・・」

ウキ「どれだけの時が・・・」

「大法師「無駄ではない、その日々があり、今日がある・・・ちがうか？」

ウキ「・・・行きますよ、原子炉ですか」

「大法師「ウキタイ」

ウキ「やりますよ、なんでも・・・その母なるライカの犬の意志のままに・・・俺は・・・俺はウの文字を持つウキタイ・・・八犬士の一人・・・ライカの犬の思い、叶う、キタイ」

●トキタイの登場

ウキタイとトキタイ。

ウキ「アンドロイドが電気羊の夢を見るのなら、ロボットのアゲハ蝶はどんな夢を見ると思う？」

トキ「蝶の見る夢、それは胡蝶の夢」

ウキ「大げさに誇張された胡蝶の夢に登場する私は、蝶が見た夢？ それとも・・・」

トキ「それはこいつが知っている。私のロボット犬江親兵衛。夢かどうかを寝ずに見る」

ウキ「寝ずに見る、ねず、み？ 犬江親兵衛は手のひらに載るサイズ」

トキ「そうさ、こいつはロボットマウス。迷路に放てばたちどころに角を曲がり、角を曲がり、角を曲がり、角を曲がり、ゴールに辿り着く。それはコンマ百秒を争う世界。出来るだけ早く、ゴールに辿りつキタイ。その思いが込められているロボットマウス。迷路の中の最短の道を読みトキタイ」

ウキ「と、この機械仕掛けのネズミを作った、犬の子の体に文字」

トキ「ト。確かに俺の左手のひらにはトの文字がある」

ウキ「ト、立派な尖った犬歯もある」

トキ「ト、八犬士の一人として、その瓦礫の迷路を駆け抜けろと・・・」

ウキ「ト、の文字を持つあなた・・・期待通りだ」

トキ「私はトキタイ、世界の謎を、からくりを、からくりのネズミによって・・・トキタイ」

●産業廃棄物捨場第七夢の島

夢の島へと廃棄された自分のロボットを回収に行くウキタイとウキタイ。

冷蔵庫、クーラー、クーラーの室外機、電子レンジ、テレビ・・・といった家電品の墓場となっている場所。

ウキ「どこだ・・・どこだ・・・どこだ、どこだ」

ウキ「ウキタイ、こつち！ ここに信乃がいる犬塚」

ウキ「信乃・・・信乃・・・」

だが・・・

コテキ「（鼓笛隊として登場）パンパカパーン、パンパカパーン！ ドンチャンドンチャン

ドチャドチャドンチャン・・・」

ウキ「おまえ達は？」

ウキ「俺達は期待外れ」

ウキ「期待外れ・・・」

ウキ「体」

ウキ「ゲの文字を持つ、ゲキタイ」

ウキ「ゲの文字？」

ウキ「ゲ、とかありなのかよ」

ウキ「ゲゲゲ」

ウキ「ケキタイ、ケキタイと、ずっと俺は自分なげここに居るのか、を自分に問い続けていた。だが、その答えは簡単な事だった・・・清らかでなく、その答えは簡単な事だった・・・清らかでなく、その答えは簡単な事だった・・・清らかでなく、その答えは簡単な事だった・・・」

ウキ「俺だけじゃない、期待外れと言われた者達が集った時、期待を上回る活躍をするだろう！」

ウキ「ゲキタイが、激を飛ばす」

コテキ「（曲を演奏しながら鼓笛隊）パンパカパーン、パカパーンパカパーン！ ドンチャンドン

チャンドンチャドンチャン・・・」

ウキ「うるせえよ、ちんどん屋」

コテキ「ちんどん屋、言うな！」

ウキ「期待外れだと、なにを的外れなことをほざいてんだよ、みんなまとめて相手してやる」

ウキ「やってみろ、おらあああ」

ウキ「おらああああああ」

ウキ「おらああああああ」

ウキ「おらああああああ」

ウキ「おらああああああ」

ウキ「だが、ちよつと待て！ 俺のロボット、犬塚信乃を起動させるまで待ちやがれ！ おまえ達は

ウキ「期待外れの者どもよ。犬塚信乃が起動するまで待ってやれ」

ウキ「この前は、警察だの、大法師の邪魔が入ったこの戦い、場所は夢の島へと移ったが、ここで改めて勝負だ」

ウキ「望むところだ」

ウキ「ウキタイ、ダメだつてばさ、戦うためにここに来たわけじゃない」

ウキ「うるせえ、すつこんでろ」

ウキ「あなた達は一つの命から生まれた、兄弟なのに」

フルタチ「さあ、ウキタイのロボット犬塚信乃、ウキタイのロボット犬山道節が、起動していきます。戦いの舞台をここ、産業廃棄物の捨て場である第七夢の島に移し、積み重なる冷蔵庫、室外機、P

C、畳、洗濯機、さらに廃材などの狭間でデスマッチのゴングを待ちましよう。空には厚い雲が垂れ込めて、ぼつり、ぼつりと大粒の雨が、兄弟で戦う悲劇に涙を流しているかのようです。この涙はすぐに滂沱となり、なにもかもが押し流していくことでしょう・・・」

ウキ「ウキタイ、ウキタイがその様子を見下ろしている」

ウキ「見る、廃棄物の山の狭間でうち捨てたロボット達が戦っている」

ウキ「あれは、捨てる産業ステルスのトラックで運んだ産業廃棄物」

ウキ「ただ、ロボットが格闘しているだけなのに・・・この心になぜかさざ波が立つ」

ウキ「おまえもか・・・そして、俺の首筋が火照り、そこにかすかに浮かび上がる二の文字」

□キ「俺のくるぶしにうっすらと浮かぶ口の文字がうっすらと熱を持つ」
ニキ「産業廃棄物の捨て場の上、厚く垂れ込める雨雲」
□キ「今にも降り出しそうな・・・」
ニキ「今が、ふりだしだ、どこへ向かうか、サイコ口を振れ」
□キ「半か丁か」
ニキ「半ならば？」
□キ「反抗する、たてつく、あらがう、テキタイへ」
ニキ「丁ならば？」
□キ「挑戦する、挑む、立ち向かう、イキタイへ」
ニキ「勝負！」
□キ「三、六」
ニキ「サブロクの半」
□キ「反抗する、たてつく」
ニキ「あらがう、テキタイの元へ」
イキ「うおおおお」
テキ「うおおおお」
ユキ「やめて・・・二人とも・・・」
イキ「どけ、邪魔をするな・・・」
テキ「うおおおお」
フルタチ「戦いの野に放たれた、狂犬二匹。組み合わせ、もつれ合い、溜まった雨水が腐敗して熱を持った温い汚水の飛沫をあげて、戦いは続きます」と、その戦いを俯瞰できる場所に登場するナキタイ。
ナキ「悲しいねえ・・・まったくもって悲しいねえ・・・戦うことがこんなに好きだったら、争いがないくなるわけではない。なあ、そうだろ、大法師さんよ」
ナキタイの後ろに、大法師。
ナキ「俺があいつらの仲間、八犬士の一人だっというのかい？」
大法師「(空の様子をうかがい) 雨か・・・」
ナキ「今日は降るっていう予報だ。さっきまでの天気はどこへ行つたか・・・空の様子はくるくる回る輪転機だ。だが、ちょうどいい・・・俺の体のナの文字も、さつきから熱を持って火照つてかわねえ・・・この雨が冷やしてくれる・・・産業廃棄物の山で暮らすこんな汚い俺にも雨は等しく降ってくる」
大法師「おまえは汚くはない・・・おまえは立派な八犬士の一人だ・・・おまえはキタナイではない、ナキタイだ」
ナキ「キタナイとナキタイ、どっちも同じもんじゃねえか。雨が・・・雨が激しくなってきた・・・」
イキタイの犬塚信乃、テキタイの犬山道節、二体の口ポットが組み合い、もみ合っているところへ、土砂降りの雨。
ザアアアアア・・・
そこで口ポット達の咆吼。
ぐおおおおおおおん・・・
イキ「どうした！ 信乃」
テキ「動け、道節！」
ナキ「ふははははは・・・奴らは地下のそのまた地下で戦うために作られた。悪天候には対応してない」
シヨートし、スパークする信乃と道節。
フルタチ「これは予期せぬ出来事、人々の罵詈雑言

の嵐にはびくともしない強靱なボディを装備しております犬塚信乃と犬山道節が、先ほどから強くなる雨脚、湿気は彼らのアキレスの踵であったたいうのでしようか。あちこちから火花を散らしたかと思うと、その動き、ぐつと悪くなつております。互いに組み合っていたはずのバトルが、今や互いが互いを支え合っているようでありませう」
イキ「信乃」
テキ「道節」
□キ「道節」
□キ「道節の鼓舞がひとしきり。」
ゲキ「雨が・・・道節の体に」
チキ「道節は耐水構造になつちやいねえ」
□キ「そもそもこんな雨の中で戦うために作り出されたもんじゃねえ」
ナキ「育ちのいい、お坊ちゃん口ポットだこと・・・戦いなんて、いつ、どこであるかわかりやしない・・・ここで戦えと困いがある中で戦いが本当の戦いだと思うかい？ 俺の口ポット犬川莊助はこの産廃の捨て場に運ばれた廃品で作つた・・・雨の中で生まれた犬川莊助は雨の中で動けなくなることはない・・・そして・・・奴は自分が汚いことを知っている・・・だから、その姿は誰にも見えない・・・ナの文字を持つ俺が作った、汚い口ポット・・・それが犬川莊助」
大法師「おまえの体のナの文字・・・なぜキタイの中に置く・・・ナを置く」
ナキ「ナの文字が期待を抱けば、汚いとなるだろう」
大法師「試しにキタナイを洗濯してみろ」
ナキ「汚いを選択する」
大法師「それは綺麗になるだけだ。洗濯して綺麗さっぱり」
ナキ「綺麗さっぱり、なにが悪い？」
大法師「綺麗さっぱり、何も残らない」
ナキ「そのなにが悪い？」
大法師「汚いを洗濯して綺麗になつたところで、綺麗さっぱり何も残らないさ、だが」
ナキ「だが？」
大法師「ナキタイは残る」
ナキ「なにが？」
大法師「悔いが残る」
ナキ「ろくなもんじゃねえ」
大法師「悔いなら可能性がある」
ナキ「可能性？ なんの？」
大法師「悔いに火をつける。焼けぼつくりつてやつは何度でも火がつくものと決まってる」
ナキ「悔いに火がつく」
大法師「燃えるナキタイ、おまえはナキタイ・・・キタナイじゃない・・・」
ナキ「産業廃棄物のゴミ捨て場。うち捨てられた産廃達の声が俺には聞こえる。もう使えない、もういらぬと、ここに捨てられた物達。産業廃棄物の山は雨に打たれ、そこから滴り落ちる雫。それは涙ではない」
大法師「それは雨。それは涙ではない」
ナキ「俺は泣いているように見えるか？」
大法師「見えるよ、ナキタイ」
ナキ「俺は汚い男だ」
大法師「その男を降りしきる雨が綺麗にしてくれる。キタナイからナキタイへと」
ナキ「雨に打たれる俺は八犬士の一人、体にナの文

字を持つ者。ナの文字にキタイを寄せろ。そう、そして、俺はナキタイ。心から．．．ナキタイ。声を上げる、この産業廃棄物の狭間で、ナキタイ、キタイを寄せ、ナキタイと俺は自己紹介する。ナキタイ．．．ずっと、これから．．．俺はナキタイ．．．」

イキ「うおおおお」
テキ「うおおおお」
ナキ「、大法師さんよ」
、大法師「どうした、ナキタイ」
ナキ「この兄弟けんか、俺が止めてやる」
、大法師「頼んだ！」
ナキタイの犬川莊助が登場する。

イキ「な、なんだ」
テキ「どうした？ ひるんだか？」
イキ「違う！ 居る、そこに．．．なにか居る．．．」

テキ「なに？ なにか居るんだ？」
イキ「居る、そこに確かに何かが居る」
テキ「確かに居る．．．」
イキ「見えない．．．機体」
ナキ「はははは．．．俺のロボット犬川莊助、人の目に付かぬ．．．」
ユキ「もしかして、光学迷彩？」
イキ「なに？」

テキ「光学迷彩だと？」
ナキ「行け、犬川莊助、こいつらのけんか、鉄拳制裁で仲裁するんだ」
犬川莊助「ぐおおおおおおおお」
イキ「うわあああ」
テキ「うごおお」

犬塚信乃、犬山道節、犬川莊助の一方的な攻撃にほこほこにされていく。
イキ「うおおおお」
テキ「くそおお」
イキ「見えないのにもってきて、この産業廃棄物の捨て場は奴のホームグラウンドだ．．．」
ナキ「はははははは．．．」
テキ「雨も激しくなつていきやがる．．．」
イキ「この犬川莊助、どんな形をしてやがるんだ？」
テキ「どういうスペックなんだ？」
イキ「まったく見えない．．．」

ナキ「産業廃棄物を捨てる業者、その名も『ス』ステル、スとお呼びください」
イキ「ステルス．．．その上、光学迷彩ときたか」
フルタチ「おっと、イキタイの犬塚信乃、テキタイの犬山道節が、文字通り翻弄されている。赤子の手が今、ひねられていく」
イキ「うわああああ．．．目に見えぬ刺客、目で見える視覚では捕らえることができない刺客」
テキ「くうううう」

ユキ「おま、取り出したのは犬坂毛野」
ユキ「私のロボット、犬坂毛野。アゲ八蝶のロボット。さあ、おまえの出番だ．．．人の目に見えぬなら蝶であるおまえの蝶覚で、おまえの触角でめちやくちやにしてしまおうんだ」
フルタチ「おっと、この産業廃棄物の掃きだめに蝶が舞つ。これがまさにゴミ捨て場という荒野に咲いたアゲ八蝶でしょうか。ユキタイのロボット蝶、犬坂毛野の登場です」

ナキ「蝶．．．だと？」
ユキ「雨が激しくなつてきた．．．犬坂毛野はこの雨の中、長時間は持たない．．．急げ、毛野」
フルタチ「おっと、宙に静止したかに思えたロボットアゲ八蝶の足下の風景が揺らいだ．．．」
ナキ「あの蝶、高圧の電流を放電している！」

犬川莊助の悲壮な声。
犬川莊助「うぐおおおお」
ナキ「なんだ．．．たかだか蝶、一匹に、なぜ」
、大法師「八人の犬士が八台のロボットを操る．．．これは現代の南総里見八犬伝だ。たとえ蝶の姿形をしていても、その力、他のロボットと互角」
フルタチ、死屍累々の中で。

ナキタイの犬川莊助の肩で、ユキタイの犬坂毛野、羽を休めるごとく．．．いや、守るべき、イキタイの信乃、テキタイの道節のため、高圧電流を放出して羽根を震わせるその姿、あなたが望むのならこの身などいつでも差し出していい、降り注ぐ火の粉の楯になろうというのか！」
イキ「雨が激しくなつてきやがった。これ以上、俺の犬塚信乃は持たない」

テキ「俺の犬山道節も、ここは撤退する」
イキ「初めて話が合ったな」
テキ「撤退するだけだ、退散するわけではない」
イキ「うるせえ、こつちだつてそうだ。覚えてやがれ」

テキ「おまえこそな！」
フルタチ「捨て台詞を産業廃棄物の捨て場に吐き捨てて、去つていきます。兄弟対決、またしても決着つかず。イキタイと犬塚信乃、テキタイと期待外れと犬山道節が戦いの場を後にします。残るは遺恨。悔いが残るとはまさにこのことでしょう」
ナキ「悔いは、いずれまた火が付く、焼けぼっくいは、いつか燃え上がる」

●学校がない
ほのか「(学級日誌) あの日の前日、私は間違つて、この学級日誌を鞆に入れて帰つていた。でも、そのおかげで、私のおかげで、この日誌だけは私達の手元に残つたのだった．．．日誌以外のものがあの朝、なくなつてしまった。私達の学校がなくなつていた」

益子「ここ．．．に．．．あつたよな、学校」
吉田「ない．．．なんでないんだ？」
田尾「だつて．．．ない」
松井「ここに、ない」
口バート「なんでないんだ？」
ほのか「学校がなくなつてる．．．」
田尾「学校がなくなつた？」
おおさき「ないんならしかたがないよ」
益子「しかたがないつて」
おおさき「また私達は別の学校を探さなきゃなんないのか」

越中「またか」
石田「まただ」
吉田「君達は．．．それで．．．転校してきたの？」
越中「そつだね．．．」
石田「探すしかない」
益子「なくなつた学校を？」
おおさき「どこかにある学校を」

松井「あるの？」
越中「学校はたくさんあるよ」
吉田「僕らが転校できる学校が？」
平川「ある・・・さあ、出かけよう」
おおさき「学校を探しに」
ほのか「・・・学校を探しに？」
越中「勉強する場所を探すんだよ」
松井「・・・僕たちは転校生になるの？」
おおさき「そうよ」
田尾「転校生に？」
越中「そうだよ、僕らと一緒にだ」
平川「僕らの仲間入りってことだね」
石田「そうだね、そういうことだね」
ロバート「転校してきた君たちが僕らの仲間入りをするはずだったんじゃないのかい？」
おおさき「そのはずだった・・・でも、今じゃ、君達と転校生の仲間入りだ」
在校生一同「えええ」
ほのか「(学級日誌)そして、私達は歩き始めた。学校を探す・・・旅が始まった。私達はこの日誌がある限り、うるし組はどこに行ってもうるし組だ」

●八犬士が揃う
舞台上にイキタイ、テキタイ、ユキタイ、キキタイ、カキタイ、ウキタイ、トキタイ、そしてナキタイの姿。
八犬士が揃った。

そこに、天からの伏姫の声。
伏姫の声「東の果ての国に散らばりし八犬士よ、我は伏姫。おまえ達は、城を目指せ」
イキ「その城はいずこ？」

伏姫「北緯三十七度二十五分十七秒 東経百四十一度ゼロ二分ゼロ一 福島県双葉郡大熊町大字夫沢字北原二十二番地」
テキ「それは・・・」

、大法師「福島第一原発・・・八台のロボットは城から十キロ離れた場所からスタートする」
テキ「十キロ圏外」

、大法師「我々は君達にキタイする」

イキ「それは・・・人が行けない場所・・・」
、大法師「その天守閣にある核の核心を村正で突くんだ」

ユキ「村正？」
、大法師「放射線量に色をつける染料だ」

トキ「染料？」

伏姫「汚れに、色をつけるんだ。この大地は汚染されている、だが、それは見えない」

カキ「それを染めろ、と」

、大法師「色をつけるんだ」
ウキ「放射能の可視化」

、大法師「それがおまえ達、八犬士に与えられた使命だ。地球の周回軌道上のスプートニク二号から放たれた命、その命を使う使命がこれだ」

イキ「、大法師、放射能に色をつけ可視科を歯科の歯医者のおまえが指図してんのか」

テキ「いくつかの顔を持つ歯医者なんだ？」

キキ「可視化の歯科医であり」
カキ「同時に八犬士を集める、大法師」

トキ「その顔はいくつあるのか」
ナキ「顔の下に顔が、そのまた下に顔が・・・」
ユキ「顔の下に顔、その下に顔、この歯科医、マトリョーシカのように」

、大法師「線量が多ければ多いほど、染料の色は濃くなる。なにがそこで起きているかを、目で知ることだ。放射線量を染めろ・・・なにが今、そこで起きているか、目の当たりにできるように・・・おまえ達にキタイする」

イキ「核心に辿り着くまでに必要なロボットのスペックはなんだ」

、大法師「瓦礫を乗り越えなければならん」

トキ「そのためのスベックは？」

、大法師「そのロボットは段差百五十センチ以上を乗り越えていけること」

キキ「段差百五十センチ以上」

カキ「百五十センチって、かなりのもんだな」

、大法師「辿り着け・・・どんな手段を使っても・・・そして」

テキ「まだあるのか？」

、大法師「防水加工を施し、水の中を進むことができる駆動装置を装備すること。上下前後左右に可動する力メラをつけること。画素数は一億一千万画素以上」

ユキ「そんなのロボットっていうより・・・」

イキ「惑星探査機だ」

、大法師「さらに」

テキ「さらに？」

、大法師「・・・放射線の電子機器への影響が大きいの。なまじの装甲では電子機器が壊れる」

カキ「鉛での装甲」

キキ「湿度、熱への対策ってこと？」

、大法師「誰にも、炉心の中がどうなっているのかわからない」

イキ「わかったよ・・・」

テキ「わかった？ なにがだ？」

イキ「中がどうなっているか、わからないというところがわかった・・・」

●テキタイの側

ゲキ「・・・汚染された」

コテ「汚染されたモノは、もうそこで終わりなのか？」

テキ「そんな言葉は鵜呑みにするな！」

コテ「鵜呑みにしない？」

テキ「(二語一語区切ってはっきりと)う、呑みに、する、な！」

ゲキ「う、を呑まないで、う、を出して」

チキ「う、を出す？ どういうことですか？」

テキ「オセンの中に、ウ、を入れてみる」

ゲキ「それで、オ、ウ、セン」

チキ「応戦！」

コキ「汚染されたら鵜呑みにしないで」

チキ「うを入れれば応戦」

テキ「我々は・・・応戦する」

ゲキ「汚染に応戦」

コキ「汚染への応戦、その戦いはいつまで続くんですか？」

テキ「下降線をたどる、その日まで」

ゲキ「その日は・・・いつ来るんですか？」

テキ「おそらく・・・何万年か後に・・・」
大法師「同時多発に起きている戦争、それが除染
という戦争だ」
チキ「その戦争に勝ち目はありやなしや・・・」
□テ「応戦に勝ち目もくそもあるか」
ゲキ「戦わずにはおれない、だから応戦するのだ」
テキ「他の八犬士とやらが、あの城をめざすつもり
なら、俺達はそいつらよりも早く辿り着キタイ。
期待外れの者どもよ。俺に続け・・・ここに居る
意味を見つけるために。ここに俺達が居る意味を
・・・」
□キ「テキタイの兄貴、意味は俺にもありますか？」
テキ「おまえの文字は」
□キ「□・・・俺は□キタイ。濁れない□。キタイ
の後に付いても、テキタイの兄貴、あんたの前に
ついたとて、□テキタイ、これでは意味をなさな
い」
ニキ「それは俺も同じだ」
テキ「おまえの文字は？」
ニキ「俺の文字は二、ニキタイ、キタイニ」
テキ「俺の前についてみる、テキタイの前に二の文
字を」
ニキ「似てきたい・・・ぎりぎりです。ぎりぎり、
意味をなしてやしません」
テキ「諦めるな、意味はある、必ずある。おまえ達
は今、そこに居る、それに意味があるはずだ・・・」
ニキ「意味を早く、意味がないと、忌み嫌われるの
がこの世の中」

●イキタイのロボット工房

イキ「イキタイとユキタイ」

□キ「ロボットの目、それはセンサーだ」

□キ「センサーはなにを見る？」

□キ「千の差を見る」

□キ「それがセンサー」

□キ「千の差を見極めことができるようになった。
ここまで来るのにずいぶん掛かった、最初の一行

(いちこう) 錯誤」

□キ「二行(にこう) 錯誤」

□キ「三行(さんこう) 錯誤」

□キ「試行錯誤」

□キ「その繰り返しだ。一行錯誤のセンサーは、百
の差どころか、十の差すらも見極められなかった」

□キ「十の差すらわからない、ぐちゃぐちゃに混ざ
って見える目」

□キ「千の差を見極めるセンサーにはほど遠い、十
の差を見るセンサー」

□キ「センサーで物は見れない」

□キ「なに見たって、瞳の中で攪拌されてしまう」

□キ「使った後に家族は誰も洗おうとはしないしね」

□キ「どういうこと？」

□キ「いやそれは家庭の事情ってやつで」

□キ「二乗してみても、十掛ける十」

□キ「百にしかならない」

□キ「センサーの百倍ないと」

□キ「センサーにはほど遠い」

□キ「そんな大量のセンサーを積んだら、もうロボ
ットはそれだけで一杯になっちゃう」

□キ「作業用のアームも」

イキ「サンプルを採集するトランクも」
□キ「電子機器の温度を保つサーモスタットも、記
録のカメラも」
イキ「それにバランスだって必要だ」
□キ「それをどうやって搭載するの？ もつともつ
と頑丈にしないと」
イキ「違う？」
□キ「違う？」
イキ「もつと、軽くするんだ・・・」
□キ「軽く？」
イキ「そう、犬塚信乃のカスタマイズ、それは軽量
化だ」

●学校を探す旅

まるでそれはジプシーが移動するように・・・

その中、ほのかは学級日誌を書き続けている。

ほのか「(日記を読み上げる)三月ヨモギ七日。学
校を探し求める旅は続く。テントを畳み、沸かし

たほうじ茶をポットに詰めて、さあ出発。一夜の
宿をありがとございました。と。オフシーズンの

キャンプ場には誰もいない。だが、いなくても
礼儀正しく私たちは挨拶して歩き出す」

宇佐見「そろそろ休憩しない？」

ほのか「まだ、歩き出したばかりじゃないか」

田尾「分かれ道だ」

□バート「右、細く険しい山道、左、街」

松井「どっちにする？」

益子「僕らの学校はどこにあると思う？」

ほのか「右ね」

吉田「そっちは細く険しい道だってば」

宇佐見「左じゃないの？」

ほのか「苦労は買ってでもしろって言うじゃない」

一ノ瀬「売ってるの？ 苦労って」

□バート「買ってきたのは三百円分のおやつだけだ
よ」

松井「どーしよう」

田尾「どーする？」

益子「どーする？」

宇佐見「どーしよう」

越中「ちよつと休もう」

元在校生達「わーい」

宇佐見「わーい、わーい、わーい、おやつだ、おや
つだ、おやつを食べよう」

吉田「なにがある？ なにがある？ なにがある？」

□バート「えーつとねえ、えーつとねえ、えーつと
ねえ・・・」

益子「おやつは三百円までだ」

一ノ瀬「バナナはおやつに入るんですか？」

ほのか「あなた達はどんなおやつを持ってきたの？」

平川「僕はダース」

石田「僕は森永のキャラメル」

おおさき「私はルックチョコ」

□バート「他には？」

転校生達「それだけ」

□バート「え？」

平川「それだけ」

宇佐見「ええええええ」

一ノ瀬「だって、おやつは三百円までだよ」

石田「そうだよ」

田尾「三百円までってことは三百円までは使ってい

い、つてことなんだよ、わかっている？」
越中「もちろんだよ」
松井「じゃあ、なんで、チョコひと箱とか、キャラメルひと箱だけなの？」
おおさき「三百円あるからって、三百円使わなくてもいいかなって思ってる」
□バート「え？」
宇佐見「なんで？」
田尾「だって、三百円あるんだよ」
石田「だって、そんなにいろいろあっても、食べられないし」
一ノ瀬「それはそうだけど」
宇佐見「いや、食べられるよ」
□バート「うん、そんなには食べられないよね」
宇佐見「え！ ええ？」
平川「キャラメル持つてる人がいたら、チョコ一個とキャラメル一個を交換してもらえばいいし」
おおさき「ポツキー持つてる人がいたら、交換してもらえばいいし」
松井「それはそうだけど・・・」
宇佐見「じゃあ、持ってきたのはチョコひと箱だけ・・・キャラメルひと箱だけって事？」
石田「あとは・・・これかな・・・」
益子「それは・・・なに？」
石田「キュウリ・・・の種」
□バート「なんだ、そりゃ」
石田「学校が見つかったら、校庭の片隅に撒こうと思ってるんだ」
一ノ瀬「キュウリを？」
石田「これは僕の家で育てていたキュウリの種だ・・・」
そして、同じような袋を取り出す、平川、越中、おおさき。
平川「僕はナス」
越中「僕はネギ」
おおさき「私は・・・トマト」
田尾「学校に植えるの？」
石田「どこか、空いている土のあるところに」
宇佐見「キュウリなんか、売ってるのを買えばいいじゃん」
石田「ちがうんだ」
田尾「ちがう？」
石田「・・・ちがうんだ、それじゃあ」
一ノ瀬「たいへん」
ほのか「どうしたの？」
一ノ瀬「私、植える種をなにも持ってきてない」
益子「バナナがあるよ」
田尾「バナナ植えるの？」
吉田「バナナ植えて、バナナが成るものか？」
益子「え？ じゃあ、バナナはどうやって栽培するの？」
宇佐見「あ！」
益子「なに？」
宇佐見「バナナ、もう全部食べちゃったよ」
松井「なんてことするんだよ！」
吉田「こいつ、本当に！」
益子「おいおい、おいおい」
宇佐見「だっておやつだよ、おやつバナナだよ、なんで食べたからって、そんなこと言われるの？」
□バート「バナナの皮は残ってるんじゃないか？」

宇佐見「皮はある！」
松井「皮を植えれば・・・」
一ノ瀬「ちよっと待って、それって！」
ほのか「なに？」
一ノ瀬「バナナの皮が成るんじゃないの？」
宇佐見「そうか！」
□バート「そうか？」
石田「さあ、休憩おしまい、おしまい」
ほのか「行きますか、学校へ」
おおさき「学校を探しに・・・」
石田「キュウリが植えられるところへ」

●ソ連・ロケット発射場（回想）
ライカ犬の打ち上げの様子。
スプートニクに収容されているライカ犬。それを囲んでいる四人のスプートニク作業員。
スプートニク作業員1「人工衛星スプートニクの狭い部屋の真ん中で犬はじつとしていた」
スプートニク作業員2「出してくれ、と、ドアを叩くこともなく」
スプートニク作業員3「息が苦しいと、壁をかきむしることもなく」
スプートニク作業員4「ただ、部屋の真ん中でライカ犬はじつとしていた」
伏姫「ワン・・・」
スプートニク作業員3「待っていた」
スプートニク作業員2「待っていた？」
スプートニク作業員4「なにを待っていた？」
スプートニク作業員1「この科学の犠牲者は何を待っていたというのだ」
伏姫「ワン、ワン・・・」
スプートニク作業員4「そんな目で見るなよ。なぜ、おまえが行かなければならない？ それがなぜ、おまえなんだ？ 安全だと人は言う・・・本当にそんなのか・・・それはわからない・・・それでちよっとしよう・・・犬のおまえから見たらおかしなことかもしれないが、それが人間だ」
伏姫「ワン・・・そのために私は・・・ワン・・・飛ばされる？」
スプートニク作業員2「そうだ」
伏姫「飛んだ私を・・・誰かが助けに来てくれるの？」
スプートニク作業員3「おまえは空を飛ぶ犬。高い空を飛ぶ犬。人だってまだ飛んでいない高い高い空を飛ぶ犬。その空は素敵な空であるはずだ・・・」
伏姫「それで・・・私は・・・どうなるの？ 私は安全？」
スプートニク作業員1「安全だ」
スプートニク作業員1、去る。
スプートニク作業員2「安全だ」
スプートニク作業員2、去る。
伏姫「本当に安全？」
スプートニク作業員3「安全だ」
スプートニク作業員3、去る。
スプートニク作業員4「おまえに続いて、やがて、人が宇宙へと飛び出していくだろう」
スプートニク作業員4、去る。
伏姫「・・・またそんな夢を見た・・・なぜ、こうなったのか・・・あの時、もしかしてこうしてい

たら・・・私が悪かったのか・・・心のどこかで繰り返している・・・地球の周回軌道をどれだけ回り続けても、その夢は追いかけてくる。スプルト二ク二号という小さな小舟で航海に出た私。航海する私を後悔が襲う・・・無限の追いかけてこ。けれども・・・けれども、私の子供達よ・・・イ、ユ、テ、カ、キ、ナ、ウ、ト・・・の文字を持つ八人の子らよ。地球を回る私を、越えて行け。キタイを上回れ。おまえ達に望むこと・・・それは期待以上だ」

伏姫「空を巡るライカ犬・・・俺の姿が見えるかい？俺の声が聞こえるかい？」

伏姫「イキタイ」

イキ「地球の周回軌道に打ち上げられてしまった、犬よ・・・おまえは生きてたかったかい？」

伏姫「イキタイ」

イキ「生きてたかったらうな・・・」

伏姫「おまえは？」

イキ「・・・俺はイキタイ。親知らずを抜き、親を知り、ワレシラスを抜いて・・・俺は俺を知る・・・俺はイキタイ・・・」

伏姫「おまえはイキタイ。イキタイならやることがあるはず」

イキ「線量を染料で染める」

伏姫「汚れた赤い色を目の当たりにしろ」

イキ「見えてどうする？」

伏姫「見れば、知ることが出来る」

イキ「見て、知る・・・」

伏姫「赤い大地はなにが起きているかを告げる・・・大地が赤くなつたことを知るだけではない、大地はシルエツト・・・そのシルエツトはなにが落ちた陰であるかを知る」

イキ「知れば？」

伏姫「知れば人は覚悟する」

伏姫「どうすればいいか、その選択肢が見える」

イキ「選択肢を吟味する？」

伏姫「違う」

イキ「違う？」

伏姫「見る事によって知る。道はたった一つしかないことを知る・・・」

イキ「道を知るため・・・」

●八犬士、出陣

伏姫の台詞の間に八犬士が舞台上へ。立ち止まりたらずむ。

伏姫「マイライフアズアドック。少年は毎日の日記の最後に書き記す。マイライフアズアドック、僕の人生はその犬よりはましだ。と。その犬は口ケツトで打ち上げられた。九十分で地球を一回りする周回軌道へ。繰り返される九十分の百九十二万七千二百回目的ことだった」

カキ「原子炉に向かい立つ。この足が震える。あれが福島第一原発。十キ口手前に立つ、私の足が震

える。伸び放題の雑草が揺れ、そこに立つ私の足が震える。△キ出しの荒れた大地が陽炎に揺れる。揺れる大地に私のロボット、犬村大角、リフトダウンだ！協力、千葉工業大学ロボット研究会、国際薬科大学サバイバルゲーム研究会、都立鷺宮西航空高専有志、月刊モデルフラフィックス、ありがとうございました！いざ進め！犬村大角！！」

フルタチ「戦うロボットがいるところにこのフルタチあり・・・さあ、今日もお送りしましょう、ロボット報道ステーション。四方八方八方（しほうはっぽうはちほう）から、八犬士は十二方位からやってくる。目指すはゲンという名の城、その天守閣へ。降臨せんがため・・・さあ、十キ口圏内、キープアウト、関係者以外立ち入り禁止の標識を越えて、今、入ってきました、カキタイの重火器ロボット、犬村大角を乗せたトレーラーであります。デツキアップがゆつくりと行われ、犬村大角が降臨してまいります。モスグリンの迷彩に彩られたその機体。キヤタピラで駆動するまるで戦車のような下半身、上半身から突き出た砲塔が右に左にと、あたりの様子を伺うように、敵の姿を探すように小さな旋回を続けております。汚染に応戦するという戦いの花道を行います。その背後に立つコントローラーを握りしめたカキタイのその勇姿。ふてぶてしい表情であります」

●イキタイのロボットの工房

まだ信乃を改造中のイキタイがこのフルタチの放送を聞き。

イキ「もう向かい始めた奴がいるのか？八犬士いるなら、みんな足並み揃えてとかはねーのか？」

●十キ口圏内

実況中のフルタチ。

フルタチ「早いもんがちの一番手は犬村大角。カキタイのロボットであります。それは・・・重火器を備えた、戦車隊。今、重火器が瓦礫の大地を進んでいく。これぞ重火器隊」

カキ「行く手を阻む障害物を越えようとなご思っな、破壊しろ、吹き飛ばせ。十二ミリ装甲弾用意！」

犬村大角、重火器一斉掃射

フルタチ「おっと、ここでもう一斉掃射だあ！この先制攻撃、どう見ますか？、大法師さん！」

フルタチの横には解説者の、大法師がいる。大法師「そうですね、カキタイはあの瓦礫を越えて行く、という発想を捨てて、破壊して道を作るという逆転の発想できましたね」フルタチ「なるほど、普通ならこの瓦礫の山を越えていく、乗り越えようとするものですが、カキタイの場合は」

カキ「道を作れ」

フルタチ「自らの道を自らの分身であるロボット犬村大角に作らせると。目の前に道はなく、自らが進んだ跡に道はできる、と。爆撃が続きます・・・が、しかし・・・どうした？おっと、ここでカキタイの犬村大角の履帯の足が止まった。キヤタピラの耳障りな音が止まった」

カキ「ここまでか・・・」

フルタチ「瓦礫のバリケードはやは一筋縄ではいかないか。重火器の一斉掃射の進撃はここで限界と

「うのか」

カキ「後に続くキキタイよ、犬飼現八よ。トキタイよ、大江親兵衛よ。道は作った、さあ、俺を越えていけ、重火器隊犬村大角を越えて城へ、天守閣へと辿り着いてくれ」

キキ「行くんだ、トキタイ、カキタイの上をいけ、上書きして進むんだ」

トキ「行け、ロボットマウスよ、大江親兵衛よカキタイの重火器の上を上書きして進め・・・」

フルタチ「トの文字を持つトキタイの手のひらの上にロボットマウス、迷路からの脱出にかけてはこのロボットに今、敵う者なしと言われた大江親兵衛。紫の流線型のボディ、流れ落ちる一滴の涙のような美しいデザインの犬江親兵衛が大地に置かれます」

トキ「紫、それが世界で一番美しい色」

フルタチ「流線型のボディに散りばめられた南国の鳥の羽の装飾が福島にそよいでいる」

トキ「さあ、総員、出撃だ！」

フルタチ「トキタイの腕が宙に高々と掲げられた。おっと、それが合図だったのか、トキタイの背後の四トントラックの荷台に積まれたコンテナ、今、ドン！と鈍い音を立てて四方が開いた。その中から、紫色の滝が地面へと流れ落ちていく」

大法師「これは滝じゃありませんね。ロボットです、無数のロボットマウスです」

フルタチ「これは驚愕の展開・・・トキタイが用意したロボットマウスは手のひらの上の一台中はなかった・・・滝のように大地に零れ落ち、染みのように広がっていく、このすべてがロボットマウス犬江親兵衛だというのが・・・」

トキ「ロボットマウスが一台だと誰が決めた？ネズミってのは元々、群れて動くものなんだよ。ただし、このネズミは群れてペストを運ぶのではない・・・放射線量を染める染料を運ぶ。進め、犬江親兵衛達よ・・・レミングのごとく」

フルタチ「トキタイの口から今、レミングという言葉が発せられました。日本では旅ネズミという名称が用いられております、この北極圏ツンドラ地帯を生活圏とするネズミ。レミングといえば、集団で海に飛び込み自殺すると誤解されおりますが、そのような習性が生きとし生ける生物にあるわけもなく、大いなる誤解を世界で受けている動物であります」

トキ「レミングよ」

フルタチ「それどころか、レミングは泳ぎもうまく、川を渡ることでもできると言われております」

大法師「すごい数ですね・・・千や二千じゃきかないでしょうね」

フルタチ「そうですね、皆さん。これは相当な数だ。レミングの波、いつしか陣形を作り、足並みを揃えての行進となっています。今、鶴翼（かくよく）の陣から鋒矢（ほうし）の陣へ」

デキ「・・・十キロ圏内。瓦礫を渡る海風。潮の香りが鼻をくすぐる。陽炎が揺らぐここには道節の姿しかない。海からの強い風が吹いている。俺のロボット道節から伸びたアンテナの先、巻き付けた布きれの吹き流しがはためく。目指す城はまだ遠い」

フルタチ「強い絆で結ばれているはずの八犬士から

早々に敵前逃亡したテの文字を持つ一人独立愚連隊、トキタイのロボット道節。古今東西、ロボットは人型であるべきか、それとも人型こそナンセンスか、といった議論にとどめを刺そうというのか、トキタイが設計し、生み出した人の姿をしたロボット道節が、瓦礫をよじのぼり、沼地に足を取られることなく・・・確実に歩みを進めてゆきます。慎重に瓦礫の間を進む人型ロボットの姿は、まるで前人未踏の山を登る登山者の姿を見るようであります。足場を確保し、手を伸ばし、つかみ、体を押し上げ、また次なる足場へ、ゆっくりとではあります、確実に進んでゆく。辿り着キタイ、という期待を胸に、道節は進んでいきます」

しかし、

フルタチ「おっと、ここで」

トキ「ここまでだ・・・」

キキ「どうした、トキタイ、おまえの大江親兵衛はこの先に行けるだろう・・・おまえが行かなくてどうする・・・」

トキ「僕のマウスは小さく、賢く美しい・・・そうだ・・・僕は美しいロボットが作りたかったんだ」

フルタチ「目の前には泥の沼、津波の海水を浴びた塩」

トキ「下の土はぬかるんでいる・・・泥だ・・・」

フルタチ「抜け道を探して走り回るロボット、それが犬江親兵衛」

キキ「天守閣へ向かうなら防水、耐熱はほどこしておくと、言つてあつたはずだ」

トキ「それはできてる。水をかぶっても壊れやしない、ただ」

キキ「ただ？ なんだ？」

トキ「汚れるのはごめんだ」

カキ「なんだとお！」

トキ「僕の名はトキタイ。そのトキタイが汚れてしまえば、ドキタイとなる。ドキタイとなると、僕がここに居る意味がちがう。トキタイならば、直面する問題を解く、説得する。読み解きたい、と、すべては僕が自ら解決する方向へと向かうもの、けれども、もしもトの文字が濁つて、ドとなり、それに期待を寄せて、ドキタイとなった日には。ドキタイ。そこをドキタイ、そこからドキタイ・・・退くことしか頭になくなる」

キキ「故に泥をかぶりたくはないと」

トキ「当たり前じゃありませんか」

カキ「トキタイ」

トキ「なんですか？」

キキ「おまえのロボットは」

カキ「マイクロボットの犬江親兵衛は」

キキ「泥をかぶつても美しいとなぜ思えない」

トキ「泥をかぶつても・・・美しい・・・」

カキ「そうさ、トキタイ、おまえが濁り、ドキタイになつたとて、心のそこからドキタイと思つてい

るわけではないことを俺達は知つているぞ」

キキ「・・・ドキタイという汚名。自らその道を他の者に譲つてしまふ、という意味。だがそれは泥によつて汚れた汚名であつて、おまえの本心であるはずがない」

トキタイ、泥の中へ、トキタイからドキタイへ。

トキ「泥をものともせず・・・進め犬江親兵衛。進め、進め、進め・・・泥の汚れなど、汚れのうちに入らない・・・たとえ泥をかぶって汚れたとしても、それは洗い落とせる汚れ。だが、汚染された汚れは洗い落とすことすらできない・・・俺達が戦つのは、その汚れだ・・・」

、 大法師「フルタチさん、フルタチさん」

フルタチ「はい、こちらフルタチです」

、 大法師「こちらシーサイドのカメラですが、今、海からウキタイのロボット犬田小文吾が姿を現しました」

ウキタイの手にひときわ大きな白い風船。

フルタチ「おっと、ウキタイが普段手がけているロボットは深海作業用であります。今回、与えられたこのミツシヨン」

ウキ「ゲンという名の城へ向かえ、天守閣を下げ、というこの命題」

フルタチ「それをいかにクリアしようというのか？ウキタイのロボット犬田小文吾、海からの登場であります。ギリシヤ神話の海の神ポセイドンの上陸を思わせます」

ウキ「汚染水の流出により、漁業は制限、すでに四年以上、この海に大漁旗は翻っていない。この悲劇の海からの上陸作戦だ」

フルタチ「浮上してきた犬田小文吾のボディはなんと白」

ウキ「白、白・・・真つ白だ。白き羽毛のガウンのごとき素材に包まれた、我が深海作業ロボット犬田小文吾」

フルタチ「もこもことした大きな体が今、水面に白い飛沫を吹き上げ、海面へと浮かんでいきます。日々、深海においてダイオウイカとの死闘を繰り広げているウキタイの愛機、犬田小文吾が今、浮上して参ります」

ウキ「見よ、この姿、汚染が進んだとはいえ、青い海がまるで空のようだ。その空に浮かぶ、雲のような我が犬田小文吾」

フルタチ「深海作業ロボットという触れ込みからのイメージを大きく裏切つての登場です、大さん、これはどうですか？」

、 大法師「そうですね、深海の作業ロボットを設計するということは水圧との戦いですからね。この雲形のロボットの白く、柔らかい素材は、そのために開発されたものですね」

フルタチ「なるほど、そして、深海用ロボットを陸で運ぶのではなく、海からの上陸、考えましたね、大法師」

、 大法師「ここから、どうやって建屋に辿り着くかですよ」

フルタチ「ウキタイの犬田小文吾、海面からさらに浮きます、浮上します。ウキタイ、浮き雲作戦、浮き雲オペレーションとでも申しましようか。海面からその巨体を海面の上へ・・・浮かび、いや、ちよつと待つてください、浮いたわけではありませんね、大さん」

、 大法師「足が出てます」

フルタチ「ウキタイの浮き雲から足が出てます、二本、いや、四本、いや六本の足・・・」

、 大法師「八本です」

フルタチ「ウキタイの浮き雲、八本の足に支えられ、

ゆつくりと上陸していきます。八本の足、四方八方へ広がり、その姿はまるで、這い回るタランチュラのよう・・・」

、 大法師「浮き雲が、蜘蛛のように八本足で進んでいますね」

ウキ「映像を送れ。浮き雲の目、蜘蛛の目で建屋の中を見渡すんだ。な、なんだ！」

フルタチ「おっと、これはどうした、浮き雲の蜘蛛の足、もつれております」

ウキ「放射線という一線を越えることができないというのか」

フルタチ「足を取られたように浮き雲、ゲン城への進路を外れた・・・はぐれ雲に・・・ここで、でんでんでんか・・・」

、 犬田小文吾、空気が抜けて小さくなっていく・・・

ウキ「よくやった、背中コンテナを解放しろ、積み荷を放て。蜘蛛の子を散らせ」

、 大法師「蜘蛛の子？ 浮き雲の子機か？」

フルタチ「蜘蛛ではない、蜘蛛ではありませんね、これは蝶です」

イキ「蝶だと？ ウキタイの蝶か？」

ユキ「私のロボットアゲハ犬坂毛野」

フルタチ「浮き雲から放たれた蝶」

イキ「ウキタイのロボットに犬坂毛野を積んでいたのか」

ユキ「私の蝶は、十キロ圏内の端から天守閣までバツテリーが持たない」

ウキ「同時に私の浮き雲、犬田小文吾では、天守閣にたどり着けたとして、その奥の核心にたどり着けるか確信がない」

ユキ「私、ユキタイと、ウキタイが力を合わせてれば、きつとこのミツシヨンをクリアすることができるとはならないかって」

イキ「ユキタイとウキタイのユ・ウ・キタイ」

フルタチ「おっと、これは予想外のタッグを組んだ。そして、タッグの名前、ユニットの名前が今、発表されました、その名は」

ユキ「ユキタイ・ウキタイキ」

フルタチ「有機体。それは命ある個体、つまり生物がそれぞれ各部分において互いに関係を持つことでもあります。そして、それは単なる部分の寄せ集めではなく、一つの統一のことであり、それはさらに広義において、社会・国家・民族、人のつながりにも応用する。まだにこのユキタイとウキタイは単なる寄せ集めでなく、統一。互いが違いに關係を持ち相互に影響する」

ユキ「抜けば玉散る氷の刃、名刀村正を抱えて、私のロボット犬坂毛野よ、飛べ！」

フルタチ「小さな、小さな蝶がゲン城へ向かってひらひらと飛びます、その六本の細い絹糸のような足に、しつかりと抱きかかえられている染料、村正」

イキ「途中でウキタイの犬田小文吾に運んでもらう、それも海からつてのはよく考えた・・・だが、どこから入る？」

キキ「ユキタイの犬坂毛野に搭載されたカメラからの映像が届きます」

フルタチ「建屋のいくつもの扉をひらひらりと抜

けていくが、それでも、ついには閉ざされた扉の前へ」

ユキ「進めない、これ以上・・・」
フルタチ「その真下で同じく、ネズミの大群が進路を閉ざされて立ち往生している」

ナキ「騒ぐんじゃない、今、開けてやる」
フルタチ「扉、目の前でゆっくりと開いていく。まるで待ち構えていたかのように、開いていく」

トキ「なにが・・・なにが起きてるんだ？」
、大法師「よく見てください・・・ナキタイの犬川

莊助です」
フルタチ「おっと、よく見ると、建屋の中で電子系に故障により、ところどころ、その輪郭、その黒い皮膚がノイズ混じりに見え隠れしているぞ」

ユキ「ナキタイ」
ナキ「さあ、ドアは開けたぞ・・・」
ユキ「ありがとう・・・さあ、ナキタイの犬川莊助も一緒に」

ナキ「俺と犬川莊助はここまでだ・・・」
フルタチ「ここで、力尽きるのか、ナキタイの犬川

莊助、激しく痙攣してその場に崩れ落ちていった。同時に犬川莊助の体を包んでいた光学迷彩がその機能を失い、今、初めて犬川莊助の姿があらわになる」

倒れ行くナキタイに助けの手を差し伸べるユキタイとトキタイ。
だがナキタイその手を払いのけ、倒れ込みながらも・・・

ナキ「行け、行くんのだ」
ユキ「ありがとう・・・」

フルタチ「犬坂毛野は中へ、ゲン城建屋の最深部へと舞い込んでいく、そして続くはトキタイの犬江親兵衛の群れ。そして、ここで、ユキタイの口ポット犬坂毛野搭載のカメラの映像が届きます。相当な蒸気がまだ立ちこめていますね」

ユキ「どこに・・・どこに村正を投下すればいいの？ 見えない・・・なにも・・・なにも見えない」

イキ「待つてる、今、俺が行く、俺の犬塚信乃が今、そこへ行く」
ユキ「イキタイ！ 今、どこに？」

フルタチ「十キ口圏外に、ようやくスタンバイしました、イキタイと彼の機体、犬塚信乃」

●テキタイの道節
フルタチ「おっと、建屋の中、最深部、天守閣の真上で、ついにテキタイの犬山道節の動きが止まった」

コキ「ここまでか」
テキ「ここまでなわけねえだろ・・・道節、どうした、動け、道節、道節、道節、道節、動け、行け、動いてくれ、道節、道節・・・俺の口ポツ

ト・・・動け・・・犬山道節・・・どうしたんだ・・・戦いは終わっていない、放射線の前で終戦するな、道節、道節、道節、道節・・・」

フルタチ「悔しい、口惜しいとはこのこと、だが、テキタイの道節の動き、完全に止まってしまっている」

ユキ「断線してる・・・」
テキ「なんだと？」

ユキ「見えない？ 私の犬坂毛野のカメラで捉えているこの映像の中」

コキ「この火花を散らしている線を繋げば・・・」
コキ「どうやって・・・」

コキ「誰かがいかねば・・・」
コキ「俺が行きます」
コキ「俺も行きます」

テキ「ニキタイ、口キタイ」
コキ「テキタイさん、あなたは言った、意味を見つけてよう」と

ニキ「意味をなさないと諦めるな、と」
コキ「意味はあると」
ニキ「必ずある、と」

コキ「だから俺達はゆきます」
ニキ「これが俺達の意味、ここに居る意味ってやつじゃありませんかね」

テキ「待て、俺も行く」
ゲキ「いえ、テキタイさん、ここは俺が」

ゲキ「ゲキタイ」
ゲキ「ここはテキタイさん、あなたの右腕の出番ってことじゃないですか？ それはこのゲキタイの出番ってことじゃないんですかね」

コキ「はい！」
ゲキ「はい！」
ニキ「ニキタイ！」
ゲキ「ここに！」

ゲキ「鉛のスーツを身にまとえ。行こう。これは意味のあることだと俺は思う」
ゲキ、コキ、ニキ、去る。

テキ「ゲキタイ！」
そして、
イキ「お待たせして申し訳ございませんでしたなあ。おまえら、俯いてんじゃねえぞ、顔を上げる、空をみる・・・そこに俺の犬塚信乃の姿があるはず」

ユキ「イキタイ！ 犬塚信乃！ 空からの登場ですか！」
キキ「無数のドローン、幾つものプロペラが誘蛾灯に集まる虫達のように羽ばたき回る」

ユキ「軽量化に成功した犬塚信乃、そのファンにぶら下げられ、大空を飛ぶ」
、大法師「それでどうするつもりだ・・・まさか」

イキ「真上から降りる・・・いや、正確には炉心に向かって落つことす」
テキ「なんだと？」

トキ「その手があつたか」
ウキ「確かに、それが一番、確実に早い・・・」
イキ「ドローン、切り離し・・・建屋の上。そこで丸まり・・・落ちていく。姿勢をまっすぐに、核心に没入するように・・・」

フルタチ「青い空、小さな点が見るみる大きくなっていき・・・それは人の形へ、それは人よりも大きく」

トキ「それは空中で膝を抱え」
ウキ「丸まり・・・一気に落ちて」
キキ「建屋の天井を突き破った」

イキ「落ちた・・・その瞬間、失われた、それは一瞬のことだった・・・その瞬間、失う・・・奪われる・・・なくす・・・痛む・・・重い思い出となるだろう・・・核心により近づいた・・・」

テキ「ニキタイ！ ゲキタイ！ □キタイイイ！」
チキ「□キタイが倒れています」
□キ「ニキタイも倒れたまま、動きません」
チキ「ゲキタイも．．．伏したまま、動こうとしま
せん」
□キ「ただ」
テキ「ただ？」
フルタチ「彼らが助けた□ポット道節が天守閣へと
降りてゆきます」
冒頭の打ち上げのカウントダウン再び。
アナウンス「10．．．9．．．8．．．7．．．
6．．．5．．．4．．．3．．．2．．．1．
．．．」
発射の爆音。
テキ「ニキタイ、□キタイ、ゲキタイはどうして
る！」
イキ「なにも起きない」
テキ「失敗したのか？」
イキ「信乃に搭載したカメラは？．．．ダメだ、使
いものにならない」
、大法師「本当に核心に辿り着いたのだとしたら、
カメラの映像など、こちらに送れるわけではない．
．．．」
フルタチ「静寂があたりを包み込んでおります」
テキ「たどり着けたのか、核心に」
イキ「なにも起きない」
イキ「静かだ」
イキ「静かだ」
イキ「とても静かだ．．．」
キキ「失敗したのか？」
カキ「成功したのか」
ドキ「わからない」
ナキ「すぐには結果がでない．．．ということか」
テキ「それはいつだ．．．」
伏姫「．．．世界を赤く染める名刀村正。それはい
つ．．．その答え、名刀の名答はすでにおまえ達
に授けた文字にある」
、大法師「八犬士の文字に、最初からそれは託され
ていたというのか．．．」
ウキ「私のユ」
ウキ「ウ」
トキ「ト．．．いや、今や僕はド、ドキタイのド」
、大法師「もとい」
ウキ「私のユ」
ウキ「ウ」
トキ「ド」
カキ「カ」
ナキ「ナ」
イキ「イ」
テキ「そして、テ」
ク。テンポよく一人一人が自分の文字を発してい

イキ「イ」
テキ「テ」
、大法師「夕時、叶いて」
伏姫「願いは．．．」
、大法師「願いは、夕時、叶いて．．．」
フルタチ「日は確実に西へ傾き、夕時を迎えようと
しております」
フルタチ「夕時、それは逢魔が時、黄昏時」
ウキ「夕日だ．．．」
トキ「空が染まっていく．．．」
ウキ「見て！」
キキ「大地も染まっていく」
テキ「大地は汚れて染まる」
ウキ「汚染」
イキ「夕日よおおお！」
、大法師「村正は核心を突いた」
フルタチ「原子炉建屋から吹き上がる真っ赤な煙。
赤い、赤い入道雲が鎌首をもたげるよう上がって
ゆきます」
チキ「取り返しは．．．つかない」
伏姫「マイライフアズアドック。少年は毎日の日記
の最後に書き記す。マイライフアズアドック、僕
の人生はその犬よりはましだ。と。その犬は□ケ
ットで打ち上げられた。九十分で地球を一回りす
る周回軌道へ。繰り返される九十分の百九十二万
七千二百回目的ことだった。極東の島国の一部が
ぼつと赤く染まった。赤く、赤く、赤い血を流し
始めた。大地へと染みた。海へと流れ出した。遠
くまで広がっていく。青い海は赤く、紫色へ。ま
だらの紫。やがて、日は沈みゆき、その紫に染ま
った海はどす黒い染みへ。青い地球。百九十二万
七千二百回、回った青い地球に．．．赤い染み、
染み、汚れた染み、お．．．せん．．．それでも
帰ってキタイ．．．その思いが地球を回る。見上
げれば宵闇迫る暗い空に落ちる流れ星のごとく．
．．．これからも何百万回と、この星の周回軌道を
巡りながら、私はつばやき続ける。帰ってキタイ
．．．」
テキ「建屋で力尽き横たわる□キタイ、ニキタイ、
ゲキタイの体をも、また赤く染めていく」
□キ「□キタイ！」
チキ「ニキタイ！」
テキ「ゲキタイ！」
、大法師「動かぬ彼らの体に．．．これまでになく、
鮮明に文字が浮かぶ」
キキ「ニキタイの、ニ」
カキ「ゲキタイの、ゲ」
ウキ「□キタイの、□」
テキ「に、げ、ろ」
トキ「彼らが残した文字．．．それは」
ウキ「逃げろ」
テキ「ニキタイ！ ゲキタイ！ □キタイイイ！」
イキタイ。そう叫んで駆け出そうとするテキタイを止める
イキ「やめる、テキタイ」
テキ「離せ、離せ！」
イキ「行くな、テキタイ」
テキ「離せ、離せええ！」
イキ「おまえをあそこに行かせないために奴らは．
．．奴らは．．．」

テキ「離せ、離せ・・・」
イキ「テキタイ、逃げるぞ」
テキ「倒れた期待外れ達よ・・・にげるの言葉・・・忘れることはない」
イキ「逃げる・・・逃げる・・・逃げる・・・逃げる・・・熱い・・・これまで以上に、俺の体の文字が・・・イの文字が熱を持つ」
テキ「熱い、俺のテの文字までも赤く発熱していく」
ユキ「イキタイとテキタイの体の文字が交差する・・・」
ウキ「イキ」
トキ「テ」
キキ「タイ」
ナキ「(鳴き声) おおおおお」
カキ「泣くな、ナキタイ」
フルタチ「やがて夕日は沈みきり、あれだけ鮮明に染まった大地はどす黒い赤い色へと変わっていきま

ます」
キキ「帰レナイ」
ウキ「紅(くレナイ)の大地には帰レナイな」
カキ「十キ口圏内には誰もいない」
キキ「イキタイとテキタイ以外は・・・」
イキ「イキ・・・」
テキ「テ・・・」
イキ「テキ「タイ・・・」
ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと暗転していく。

闇に溶けていく中、イキタイとテキタイの慟哭が刺さる。

●エピソード

転校生達のジブシー。

靱山「見えた・・・新しい学校だ」

宇佐見「新しい学校だ」

吉田「新しい学校だ」

平川「新しい学校だ」

越中「また、そうして、僕らは新しい学校の、新しい教室の、見慣れない黒板に名前を書く」

益子「よろしくお願いしますと書いた僕らを見つめる目」

松井「目」

一ノ瀬「目」

口バート「目」

田尾「目」

靱山「目」

宇佐見「それはちよつと怖い目・・・」

松井「だけど、怖いのは僕らも彼らも一緒だ」

吉田「うまく行くことを」

平川「キタイするしかない」

知「仲良く出来ることを」

洋志「キタイするしかない」

宇佐見「キタイ」

靱山「気体、一定の形、体積をもたず、流動性に富むもの」

松井「キタイ」

石田「期待」

おおさわ「望みをかけて待ち受けること」

靱山「八人の犬士は、十一人居た」

松井「十一人いる」

洋志「八犬士が十一人？」

知「数が合わない」
越中「十一引く八は三」
靱山「三余る」
一ノ瀬「三、三とはなにの三？」
宇佐見「に・げ・ろの三・・・散開の三」
平川「散開する・・・」
益子「新たな土地へ」
おおさわ「・・・種と共に」
石田「やがて、見知らぬ校庭にキュウリの小さな芽が出るのだろう・・・キタイとは、そのキュウリの芽のことだ・・・」
ゆっくりと暗転。